

「いつもパンを裂き」

使徒の働き 2 : 37 - 47

July.2.2023

使徒の働き 2 : 37 - 47 (パウロ)

Preface

サービス産業において大切なキーワードは、「感動」だそうです。

感動があれば、物が売れるようになり、消費が生まれ、更なる消費を促すために必要なのは、また新たな「感動」です。

「感動」という言葉を言い換えるならば、「刺激」とも言い換えることが出来るかもしれません。

では、説教を聞くことにおいて大事なものは何でしょうか？

これもやはり感動でしょうか？

刺激でしょうか？

「あの先生の説教は、感動があるのよね。」

「この教会のメッセージは、とても刺激的で、何かこう感動のようなものがあるのよね。」

すると、ここにも消費が生まれます。

説教の消費、教会の消費です。

感動や刺激が無かったら、感動や刺激をくれる教会や牧師を探して行くことになるでしょう。

そしてもし、またそこで飽きたら、楽しく感動を消費出来るように、また通う教会や牧師を代えることになるかもしれません。

ここで問題になるのは、感動では、消費的感動では、人は変わらないということです。

次から次へと新たな感動、または刺激を求めていく中毒に、スパイラルに絡め捕られて行きます。

もちろん、神の言葉が語られる説教には感動があります。

刺激だってあるでしょう。

でも、その感動や刺激は、私たちが上に立って、消費者目線で消費するような感動や刺激ではありません。

説教によって与えられる感動や刺激は、その下に、御言葉の下に、イエス様の下に入って仕えたい、従いたい、礼拝したい、赦して頂きたい、ともにして頂きたいというような遜りが伴い、その遜りこそが、「語られる説教に感動を覚える」ということです。

Part One

今、使徒ペテロは聖霊に満たされて、「イエスこそ、神が約束して下さったメシアであられ、天の下でこの方以外に誰によっても救いはなく、そのメシアなるお方が、あなたがたの罪深い罪ゆえに十字架に架かれ、また、復活されて、救いを成し遂げられた」と、「そのキリストを十字架に架けたのは、他の誰でもない、正にあなたがたお一人お一人自身です」と説教をしたところ、それを聞いた人々に、感動が訪れました。

どのような感動か？

心を刺されるような感動でした。

慰めや励ましや癒しや回復などの時間が経てばやがて薄れていく消費的感動を遥かに超えた、その下に跪き、遜り、自分が自分でいられないほどの自らの情けなさや足りなさや罪深さを悟らされ、覆い包まれてしまうような心刺される感動です。

心を保つことが出来ないような、ブロークンハートな感動です。

ダビデが姦淫の罪を犯した時に詠った詩篇51篇で、「神へのいけにえは砕かれた霊。打たれた砕かれた心。神よ、あなたはそれを蔑まれません」と告白しましたが、正にそのような心刺される感動です。

消費者目線で、上に立って、物品や人を評価するような消費的感動とは、次元の違う感動です。

仕えたい、従いたい、礼拝したい、そのために生きたいという召命と使命に心捕らわれる感動です。

語られた神の言葉に心刺された状態を、的確に描写している聖書箇所がありますので見てみたいと思います。

ヘブル人への手紙4：12（パウロ）

心という心のすべてが、たましいと霊がバラバラに切り裂かれ、刺し貫かれ、自分という人を保つことさえも、もしくは、その場に立っていることさえもままならないほどに力が抜け、入らず、ひれ伏し、遜るしかないようにされてしまうのが、「神の言葉に聞く」ということです。

聖霊に満たされたペテロの口から語られた説教を聞いていた人々の口から発せられた言葉が、「私たちはどうしたらよいのでしょうか」という言葉でした。

つまり、「私に出来ることは何もありません。私がやれる、私がやれていると思っていたことのすべてが、イエス・キリストというお方の前では無に等しく、空しく、愚かで、悪でしかありませんでした」という、あたかも、旧約聖書でいけにえとして献げられた家畜が、ありとあらゆる部位、関節と骨髄という切り分けることの出来る最小単位に至るまでバラバラにされたかのような心境に陥ったということです。

その時が救いの時であり、御言葉が人の核心に入った時に起こる、「心を刺す」という出来事です。

そして、御言葉によって心刺されることは、イエス様を信じるようになったあの時あの瞬間だけのことでなく、毎日、毎週、私たちは御言葉に刺されなければなりません。

今日という日をどのように生きればいいのか、今日何を選択し、今日何のために生きるべきなのかを、御言葉に心刺されることを通して教えて頂く必要があります。

いや、答えは明確です。

今日、主イエスの証人として生かされているからには、そう生きられるようにと御言葉に求め、祈るのです。

神の言葉に、感動や刺激や慰めや癒しを求める以上に、心刺されることを祈り求めるのです。

Part Two

心を刺された人々に、ペテロは、「それぞれ罪を赦して頂くために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます」と説き、「この曲がった時代から救われなさい」とさらに勧めて、結果的に3000人もの人々が、神の言葉に刺され、洗礼を受けました。

正しく、聖霊のなされるわざです。

3000人という人数を、私たち十把一絡げのように一つの大きな群衆や集団のように安易に捉えてしまいがちですが、一群衆や一集団ではありません。

一人一人の大切な、世の中全てよりも大切な、一人の救われた者が起こった時に、天の御国でいちいち一回一回パーティが開かれるような尊い一人一人の、神のひとり子イエス様のいのちに代えて贖い出された尊い一つ一つのいのちです。

神さまというお方は、天地万物をお造りになられたお方ですから、その大きさ、広さ、深さは例えようもないお方ですが、その御業は、小さな一人一人のたましいを大切になさることによって、大きなことを成し遂げるお方です。

その神の御業に入れられ、賛同しているならば、私たちも一人一人のたましいを大事にしながら、神の御業に仕えていくのです。

3000人という一人一人を、イエス様の弟子たち12人が中心となって洗礼を授けたと思われませんが、洗礼にかかった時間一人1分だとしても、3000分、50時間掛かります。

弟子たち12人で手分けしたとしても、5時間近くかかる壮大な洗礼式だったでしょう。

そのようにして洗礼を受けた人々が中心となって行い始めたことが、使徒の働き2:42以降に書かれているのですが、普通、3000人もの人々が集まったら、その統制を図るために、制度を作り、部署を作り、組織化していくことを始めるかもしれませんが、彼らがしたことはそうではありませんでした。

使徒の働き 2 : 41 - 47 (パウロ)

偽りの霊は、人々に妬み嫌う心を抱かせ、争わせ、バラバラにしますが、聖霊は、人を一つにします。

ゆえに、妬み嫌う心に心が支配されているようならば、偽りの霊が私のうちに入り、人間なので失敗や誤りはあったとしても、キリストにあって一つになることを切望しているならば、聖霊がその内にいて下さっています。

そんな聖霊を受けた彼らが先ず行ったことは、使徒たちが語る聖書の御言葉を生きようとしたことです。

御言葉を生きることは、決して一人では出来ないことなので、神さまがお与え下さったキリストにある仲間との交わりを深め、祈りました。

組織を保つことが目的となっている組織ありきの集団ではなく、御言葉が土台となり、祈りが原動力となり、分かち合う愛が目的となり、互いになくてはならない二つとない尊い存在であることを自覚出来る、神の息が息づいているキリストのからだが形成されて行きました。

そして、そんな彼らには、多くの不思議としるしが表れましたが、その中でも、最も大きなしるし、奇跡は、皆が一つとなって、所有を手放し、分かち合ったということです。

私たちのこの人間社会において、どんな奇跡よりも大きな奇跡があるとすれば、それは、自らの所有を手放すということではないでしょうか。

日本の政党の中で最も長きに渡って政権を握っているのは、自由民主党ではなく、「お金党」、「モノ党」、「経済党」だと言う方がいらっしゃるが、「なるほどなあ」と思います。

確かに、どの政党が政権を握ったところで、有権者が一番関心を持っているのは、お金であり、物であり、経済であり、結局のところ、どれだけ自分が所有することにおいて有利になるのかが、政党選びの最も大きな動機となっています。

私たちが人を見る時も、まず目に入ってくるのは、その人がどれだけ所有しているのかということでしょう。

お金の所有、物の所有、名誉の所有、知識の所有、経歴の所有、見た目の所有などが、あたかも人の価値を決めるかのようになっていますが、いつのまにかその所有が私たちを縛り、苦しめ、心配や不安を起し、労力とストレスを引き起こしており、所有が我を自由にすると思い思わされてきたけれども、いつの間にかその所有によって、自由を失っているような状態にあります。

ここ最近、ミニマリストという最低限の所有だけで暮らすことの自由と素晴らしさを提唱する方たちがおられますが、ある面で、使徒の働きの初代教会の人々に通ずると言いましょうか、今のこんな時代において、神さまが一般恩恵と

してお与えくださっているもののうちのひとつではないだろうかとも、私個人的には考えたりもします。

イエス様は、「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。真理は、あなたがたを自由にします」と仰いましたが、使徒の働き 2 章に出て来る 3000 人の人たちは、正に、イエス・キリストという真理によって、所有という人類史上もっとも強大な束縛から解放されるという奇跡を体験し、その自由を喜び、その自由を享受し、その自由を分かち合いました。

そして、そんな彼らが、その自由を忘れず享受し続けるために、いつも、または毎日守っていたことが、「パンを裂く」という行為、つまり、聖餐でした。

Part Three

イエス・キリストが私の罪のために十字架に架かり、その身を裂き、血潮を流され、私たちのために死なれ、私たちのために復活されたことを覚えることが、「パンを裂く」という行為、聖餐に表れる一義的な恵みです。

しかも、この使徒の働き 2 章の時代の聖餐は、私たちが普段行っている聖餐式という儀式ではなく、日常の生活の営みの中に溶け込んでいた行いでした。

42 節、46 節を見てみますと、このようにあります。

使徒の働き 2 : 42 (パウロ)

使徒の働き 2 : 46 (パウロ)

私たちがこの地上での肉体を保つために必ず必要な食事を取るという日常の行為とともに、いつも、または毎日行われていたのが、「パンを裂く」という行為、つまり、聖餐でした。

私たちが行っている聖餐は、聖餐式という礼拝の中で行われる儀式となって守られていますが、その精神は儀式ではありません。

つまり、この儀式を年に 4 回しかやらないのか、毎月やるのか、はたまた毎週行うのかは、さほど重要なことではないということです。

たまに、聖餐式の回数を以前のように毎月にして欲しいとか、2 ヶ月に一遍ぐらいにしたらどうだろうかというご意見を頂くことがございますが、聖餐式の回数はさほど重要なことではないですね。

誤解しないでください。

「聖餐式が重要ではない」と言っているのではありません。

聖餐式という式に出席することや、聖餐式という式の中で過ごす時間に浸る気持ち良さだったり、または、宗教的高揚感や感動などが目的となってしまうならば、本末転倒だということです。

初代教会の聖餐の姿から私たちが教えられることは、聖餐に与っているのかいないのか、聖餐の場にいるのかいないのかではなく、聖餐、つまり、「パンを裂く」という生き方が、私たちの日々の日常の生き方になっているだろうかということなのです。

イエス・キリストの十字架の贖いの意味を心に刻み、イエス様のくびきとともに負って、御言葉に心刺され、仕え、従い、礼拝し、与えられた証人としての生き方をしているだろうかということが、聖餐式において問われるということです。

使徒の働き 1 : 8 でイエス様が、「聖霊があなたがたの上に臨む時、あなたがたは力を受けます。そして、地の果てまで、わたしの証人となります」と仰いましたが、証人として生きているのか、生きていないのかが、聖餐に与る者たちに問われるということです。

証人がすることは、自分が見たことを、聞いたことを、知っていることを、経験したことを、感じたことをそのまま話すことです。

弁護することではありません。

また、過剰に付け加えて話すことでもなく、内容をカットして話すことでもありません。

自分が体験したことをあるがまま話すのが証人です。

私たちが、日々キリストの証人として生きるためには、日々キリストを知らなければなりません。

日々キリストを知り、私が日々知ったキリストをそのまま証言するんです。

そしてキリストを知るためには、毎日、いつも御言葉から教えられ、キリストにある仲間と交わり、一つとされ、それが無ければ幸いにはなれないと思われ、思われているものから、束縛から解放されるために、握っているその手を放し、神を賛美し、礼拝すること。

それが、いつも、または毎日行う「パンを裂く」という行為であり、「聖餐に与る」ということの真意です。

どんなに聖餐式に参加して、宗教的高揚感や宗教的悦に浸れたとしても、そのいつもの、毎日の聖餐が我が身に無いならば、聖餐式は聖餐式という宗教儀式でしかなく、神社で買うお守りのように、日々の心配事から私を守ってくれると信じている迷信程度にしか過ぎない出来事に、実質上没落させてしまうことにもなりかねないでしょう。

Conclusion

これから聖餐式を執り行いますが、どうか、この聖餐に与るにあたって、「果たして、私は、聖餐を生きているだろうか。パンを裂くという行為や真意が、私の日々の生活に表れているだろうか。その聖餐から与えられる真の自由を

享受出来ているだろうかということ、今一度覚えつつ、「そのようにありたい」と、「そのようにして下さい」という祈り心を持って、聖餐に与りたいと願います。

主の聖餐の恵みが、私たちの、皆さんの日々の生活の上に表れますようお祈りいたします。

お祈りいたします。

祝祷：使徒の働き 2：42